

中村 渉（東北大学）
wataru.nakamura.a8@tohoku.ac.jp

要旨

本稿は人称構文と非人称構文を交替形式として併せ持つロシア語の *swarm* 交替の分析を提案する。Role and Reference Grammar (Van Valin 2005) のリンキング理論及び具格を最も非該当的な斜格として定義する Nakamura (2015) (cf. Jakobson 1936/1984) の提案を踏まえて、まず、非人称構文一般を、動詞意味論から文法関係（特権的統語的項）へ至るリンキング操作の無化を伴う反リンキング構文として定義した後、非人称の *swarm* 構文をマクロロール付与の無化を伴う構文として定義し、その主な特徴（主格名詞の不在、定動詞の一致の欠如）を説明する。更に、上述の非人称構文の分析を他動詞非人称構文へと拡張し、その固有の特徴である、対格名詞の単独での生起（対応する人称構文で主格標示を受ける行為者が節内に生じ得ないこと）を特権的統語的項の選択を無化する反リンキング操作から導くことを提案する。

1. はじめに

本稿は非人称構文のリンキングの統一的な説明を提案する。具体的な分析の対象は両構文を交替形式 (alternant) として併せ持つロシア語の *swarm* 動詞である。

Swarm 動詞には局所的運動、音／臭い／光の放出、占拠／豊かさの程度を表す動詞が含まれるが、言語／動詞により交替形式の数異なる。英語には、(1a,b) の 2 つの交替形式があるが、ロシア語の一部の *swarm* 動詞には、(1a,b) に対応する人称構文の (2a,b) に加えて、非人称構文の (2c) の計 3 つの交替形式があるもの (e.g. *paxnut* ‘smell’, *izobilovat* ‘abound’, *gremet* ‘boom’) がある。¹

- | | | | | | |
|-----|----|--|---------------------|---------------------|-------------|
| (1) | a. | Bees swarm in the garden. | | | |
| | b. | The garden swarms with bees. | | | |
| (2) | a. | Rozy | paxli | v | komnate. |
| | | roses.NOM | smelled.3rd.PL | in | room.LOC |
| | | “Roses smelled in the room.” [PSA=3rd.PL] | | | |
| | b. | Komnata | paxla | | rozami. |
| | | room.NOM | smelled.3rd.SG.MASC | | roses.INSTR |
| | | “The room smelled of roses.” [PSA=3rd.SG.MASC] | | | |
| | c. | V | komnate | paxlo | rozami. |
| | | in | room.LOC | smelled.3rd.SG.NEUT | roses.INSTR |
| | | “There was a smell of roses in the room.” [No PSA] | | | |

(2a) は主語項 *rozy* ‘roses’ が部屋の中で香りを不定回数放出する活動を表す。(2b) は左記の活動が部屋全体へ波及することを表し、その全域的活動から生じる「動態的触感 (dynamic texture)」を部屋の一時的属性として提示する。(2b) の主語項が伴う「全体性効果」はバラの活動が場所の属性として解釈されるために生じる含意である (Dowty 2000; cf. Rowlands 2002)。(2c) では場所名詞が、(2a) と同様に、空間前置詞 *v* ‘in’ を伴って場所格標示を受けるが、香りを放出する *rozy* は (2a) とは異なり、具格標示を受ける。本稿の目的は例文 (2a)-(2c) (特に、非人称構文の (2c)) のリンキングを提案することを通じて、(2a,c) の示す主格 (*rozy*) と具格 (*rozami*) の格交替を説明することである。

(2) のような交替現象は交替を許す *swarm* 動詞の範囲に相違はあるが、チェコ語、ポーランド語、リトアニア語にも観察される (Fried 2005: 481; Kibort 2009: 383, 391; Lenartaitė-Gotaučiienė 2014: 142)。(3)-(5) は上記の 3 つの言語全てで三者間交替が容認される臭いの放出動詞の例である。²

- | | | | | | | |
|-----|----|--|-------------|-------------------------------------|--|----------------|
| (3) | a. | V | kuchyni | voněla | | skořice. |
| | | in | kitchen.LOC | give.off.fragrance.PAST.3rd.SG.FEM | | cinnamon.NOM |
| | | “Cinnamon smelled in the kitchen.” | | | | |
| | b. | Kuchyň | | voněla | | skořicí. |
| | | kitchen.NOM | | give.off.fragrance.PAST.3rd.SG.FEM | | cinnamon.INSTR |
| | | “The kitchen smelled of cinnamon.” | | | | |
| | c. | V | kuchyni | vonělo | | skořicí. |
| | | in | kitchen.LOC | give.off.fragrance.PAST.3rd.SG.NEUT | | cinnamon.INSTR |
| | | “In the kitchen, there was a smell of cinnamon.” (Czech) | | | | |

¹ 出典が示されていない本稿のロシア語の例文は Maria Prudnikova 氏に拠る。

² リトアニア語では *swarm* 動詞の三者間交替は臭い放出動詞でしか容認されない (Lenartaitė-Gotaučiienė 2014: 148, 156-160)。

- | | | | | |
|-----|----|--|----------------------------|--------------------|
| (4) | a. | Ta kawa | pachnie | w całym domu. |
| | | this coffee.NOM | emit.fragrance.PRES.3rd.SG | in whole house.LOC |
| | | “This coffee smells in the whole house.” | | |
| | b. | Dom | pachnie | kawą. |
| | | house.NOM | emit.fragrance.PRES.3rd.SG | coffee.INSTR |
| | | “The house smells of coffee.” | | |
| | c. | W domu | pachnie | kawą. |
| | | in house.LOC | emit.fragrance.PRES.3rd.SG | coffee.INSTR |
| | | “There is a smell of coffee in the house.” (Polish) | | |
| (5) | a. | Darž-e | alyv-os | kvepia. |
| | | garden-LOC | lilac-NOM | smell.PRES.3rd |
| | | “In the garden, there is a smell of lilac (Lilac smells in the garden).” | | |
| | b. | Darž-as | alyv-omis | kvepia. |
| | | garden.NOM | lilac-INSTR | smell.PRES.3rd |
| | | “The garden smells of lilac.” | | |
| | c. | Darž-e | alyv-omis | kvepia. |
| | | garden-LOC | lilac-INSTR | smell.PRES.3rd |
| | | “In the garden, there is a smell of lilac.” (Lithuanian) | | |

ロシア語の(2c)と(2c)に対応する(3c), (4c), (5c)が提起する問題は(6)のように要約できる。

- (6) a. 主格名詞の不在：場所名詞は空間前置詞を伴って場所格標示を受け、非場所名詞は具格標示を受けるため、主格名詞が節内に存在し得ない。
 b. 定動詞の一致の欠如：動詞が節内のどの名詞とも一致せず、人称・数・性のデフォルト素性値（過去時制では、3人称・単数・中性）を実現する一致標識を伴う。
 c. (2b,c)の具格の用法が具格の他の多様な用法とどのように関連するかが不明である。

(6a,b)は主格と動詞の一致の問題である。(6c)は、(2b,c)の具格の用法がロシア語の具格の多岐に及ぶ用法（例：道具，単位，経路，二次叙述）をどう統一的に把握するかという問題を提起することを示している。また，述語が時制辞を伴う定形節が主格名詞を欠くことは定形節の時制辞に主格付与／認可を依存する文法理論（e.g. Lavine and Freidin 2002; Lavine 2010）に問題を提起する。本稿では，具格の用法を一元的に捉える枠組（Nakamura 2015）を前提として，(6a)-(6c)の課題を解決する。

以降の本稿の構成は以下の通りである。第2節では，本稿の理論的枠組である **Role and Reference Grammar [RRG]** (Van Valin and LaPolla 1997; Van Valin 2005) のリンキング理論及びそれに基づく一致標識を同定する制約と格付与制約（Nakamura 2015）を提示する。第3節では，主格名詞を欠く非人称構文(2c)のリンキングを人称構文(2a,b)のリンキングとの比較の下に提案し，前者が RRG のリンキング操作を無化する「反リンキング (**anti-linking**)」を体現していることを示す。第4節は第3節の反リンキングに基づく分析を他動詞非人称構文に適用する。第5節は結論である。

2. 理論的枠組

本節は，RRGにおける節の統語構造及び動詞の意味論から文法関係（特権的統語的項）へと至るリンキングを要約し，格付与及び動詞の一致のコントローラーの同定を担う制約を導入する。

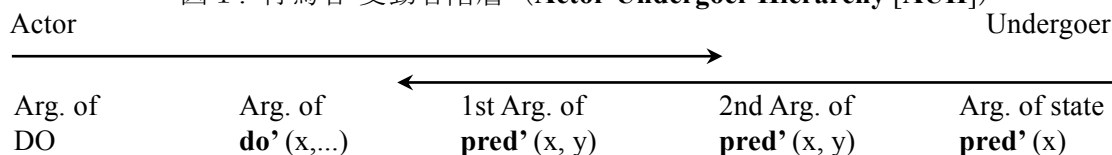
RRGは，「述部，命題，事態」という意味的単位に対応する統語的層として，①述部に相当する「**内核 (nucleus)**」，②内核と内核の義務的項が構成する「**中核 (core)**」，③中核と中核を修飾する付加詞が生じる「**周辺部 (periphery)**」が構成する「**節 (clause)**」，を想定する。上記の3つの層により構成される節の層状構造（構成素投射）及び各層を修飾する文法的操作子（操作子投射）（例：アスペクト，法性，時制，叙法）が節の統語構造の基礎を構成している。

RRGのリンキングは，動詞の語義分解表示（**論理構造**）から一般的意味役割（**マクロロール**），マクロロールから「**特権的統語的項 (privileged syntactic argument [PSA])**」，の2段階に分かれ，前者が形態語彙的（morpholexical）段階に，後者が形態統語的（morphosyntactic）段階に相当する。マクロロールは形態統語論上の目的（例：受動化，一致標識のコントローラー）のために複数の意味役割を統合したものであり，「行為者 (actor)」と「受動者 (undergoer)」から構成される。特権的統語的項は（RRGは言語全体で妥当する伝統的「主語」概念を認めないため）構文単位の「主語」であり，マクロロールのランキング（以下の(9), (10)を参照）に基づいて選ばれる。

動詞の論理構造からマクロロールへの写像は(7)の「**デフォルト・マクロロール付与原則**」と図1の「**行為者-受動者階層**」により決定される。(7a)は動詞が伴うマクロロールの個数，(7b)はマクロロールの個数が1つの場合に，そのマクロロールが行為者，受動者のいずれになるのかを決定する。マクロロールの個数が(7a)に従わない場合，その個数を動詞の語彙的素性（例：[MR1]）により指定する。行為者-受動者階層は他動詞／複他動詞の最上位の項が行為者に，最下位の項が受動者になることを定め，行為者でも受動者でもない項は非マクロロールの地位を得る。

- (7) デフォルト・マクロロール付与原則 (**Default Macrorole Assignment Principles**)
- 動詞が受け取るマクロロールの個数
 - 動詞の項が 2 つ以上：その動詞はマクロロールを 2 つ取る。
 - 動詞の項が 1 つ：その動詞はマクロロールを 1 つ取る。
 - マクロロールの性質：マクロロールを 1 つ取る動詞について
 - 論理構造に活動述語 (**do'**) がある：マクロロールは行為者である。
 - 論理構造に活動述語 (**do'**) がない：マクロロールは受動者である。

図 1: 行為者-受動者階層 (**Actor-Undergoer Hierarchy [AUH]**)



(8a)-(8f)は英語でのマクロロール付与の例である。(8a,b)の交替が示すように、受動文でのマクロロール付与は（ヴォイス交替は形態統語的交替であるため）対応する能動文の場合と同じである。

- (8) a. John [Actor] killed Tom [Undergoer].
 b. Tom [Undergoer] was killed by John [Actor].
 c. John [Actor] hates Tom [Undergoer].
 d. John [Actor] gave a book [Undergoer] to Tom [Non-macrorole].
 e. John [Actor] swam in the pool.
 f. John [Undergoer] died of heart attack.

(7a)の原則に違反する場合、例えば、他動詞／複他動詞が伴うマクロロールが 1 つの場合は、語彙的素性[MR1]により予め指定する。³

マクロロールから特権的統語的項への写像は双方向的な行為者・受動者階層を一方向的な（最も左端の‘Arg. of DO’（「動作主」）を最上位の項と見なす）階層として改訂した「特権的統語的項選択階層」に言及する(10a,b)により決定される (Van Valin 2005: 100-101)。⁴

- (9) 特権的統語的項選択階層 (**PSA Selection Hierarchy**)
 Arg. of DO > 1st Arg. of **do'** > 1st Arg. of **pred'** (x, y) > 2nd Arg. of **pred'** (x, y) > Arg. of **pred'** (x)
- (10) a. 対格型：最上位のマクロロール項（例：ロシア語、ドイツ語）
 b. 能格型：最下位のマクロロール項（例：ディルバル語、サマ語）

(9)の特権的統語的項選択階層を前提として、動詞の一致標識のコントローラーを同定する制約は以下ようになる (Van Valin 2005: 108)。

- (11) ロシア語、ドイツ語、アイスランド語の定動詞の一致（対格型）
 定動詞の一致標識のコントローラーは（(9)において）最上位のマクロロール項である。

(11)の「最上位のマクロロール項」は他動詞／複他動詞の行為者項と自動詞の唯一のマクロロール項をまとめており、両者が一致標識のコントローラーとして機能することを捉えている。

主要な格を付与する制約は(12)のようになるが、制約(12a)-(12d)はいずれも「(非)マクロロール項」への言及を含んでいる点で共通している (Nakamura 2015; cf. Van Valin 2005)。

- (12) a. 最上位のマクロロール項が主格標示を受ける。
 b. 受動者項が対格標示を受ける。
 c. 非マクロロール項は与格標示を受ける（行為者-受動者階層に違反しない場合）。
 d. マクロロール項以外の格標示可能な要素は具格標示を受ける。
- (13) 制約階層：(12a) >> (12b), (12c) >> (12d)

制約(12c,d)は説明が必要である。(12c)は Van Valin (1991, 2005)の「非マクロロール項はデフォルトとして与格標示を受ける」を踏まえているが、この定義では非マクロロール項が具格標示を受ける場所格交替構文の(14b)が問題となる。(14a,b)の相違は、(14a)のマクロロール付与は行為者-受動者階層に従っているが、(14b)のマクロロール付与（具体的には、受動者の結びつけ）が行為者-受動者階層に違反していることに求められる (Van Valin and LaPolla 1997: 145-146)。

³ この語彙的規定は暫定的なものであり、より肌理の細かい意味的説明の可能性を排除するものではない。

⁴ ロシア語はマクロロール項のみを特権的統語的項として認める言語の一つであるが、非マクロロール項も認める言語には、日本語、朝鮮語、アイスランド語、グルジア語、ルワンダ語等がある。特権的統語的項に関する関連する議論として、Van Valin and LaPolla (1997: 303-308), Van Valin (2005: 101-107)を参照。

- (14) a. Ivan gruzil drova na baržu.
Ivan loaded firewood.ACC onto barge.ACC
“Ivan loaded firewood onto the barge.”
b. Ivan gruzil baržu drovami.
Ivan loaded barge.ACC firewood.INSTR
“Ivan loaded the barge with firewood.”

(15)は(14b)におけるマクロロール付与を示している。⁵

(15) LS: [do' (Ivan, ∅)] CAUSE [BECOME be-on' (barge, firewood)] (Locative=U)

MR: Actor Undergoer Non-MR

(14b)の非マクロロール項の具格標示を説明するには、2つの方法がある。まず、「非マクロロール項は（デフォルトとして）与格標示を受ける」を維持したまま、「行為者-受動者階層において節内の他の項（co-argument）より上位のランク付けを受け、受動者として選択される優先度が高いにも関わらず、マクロロールの地位を得られない非マクロロール項」に具格を付与する規則を提案することが可能である（Van Valin and LaPolla 1997; Van Valin 2005）。⁶ 言い換えると、(14b)の例証する具格を、与格と同様に、非マクロロール項を標示する格として定義し、与格と比較して具格を（非マクロロール項を標示する）より特定の格として規定する。ただし、こうした具格の定義から、ロシア語の具格の他の多くの用法、特に、多種多様な付加詞を標示する用法（具体例は、例えば、Wierzbicka (1980)を参照）を導くことは不可能である。⁷

もう1つの方法は、(14b)のような非マクロロール項を適用対象から排除するべく、与格の定義を狭く限定することである（Nakamura 2015）。具体的には、(14b)のマクロロール付与が行為者-受動者階層に違反していることを考慮して、制約(12c)の条件（「行為者-受動者階層に違反しない場合」）に従う非マクロロール項にのみ与格標示を付与することができる。この場合、具格を斜格（文法格の主格、対格以外の格）のデフォルト的（最も無標的）な格として定義する Jakobson (1936/1984)の格理論の洞察を踏まえて、主格又は対格で標示されるマクロロール項以外の要素を標示する格として、(12d)のように具格を定義し、(13)の制約階層が示すように、制約(12d)を、その適用範囲（「マクロロール項以外」）の一部（「非マクロロール項」）に適用される(12c)の下位にランクすることになる。このランク付けにより、(12c)が適用されない(14b)の移動物名詞に(12d)を適用することができる。

(16a,b)は与格と具格を定義する両提案の相違点を図示したものである。

(16) a. Van Valin and LaPolla (1997), Van Valin (2005)

| 非マクロロール項① | 非マクロロール項② | 付加詞 |
|-----------|-----------|-----|
| AUH を遵守 | AUH に違反 | |
| 与格 | 具格① | 具格② |

b. Nakamura (2015)

| 非マクロロール項① | 非マクロロール項② | 付加詞 |
|-----------|-----------|-----|
| AUH を遵守 | AUH に違反 | |
| 与格 | 具格 | |

ここでは、与格、具格（のみならず、格全般）を単義（monosemy）的に定義することを優先して、両者を(12c,d)のように定義する。⁸

本節で要約した①節の三層構造（内核、中核、節）、②論理構造からマクロロールを経て特権的統語的項に至るリンキング、③動詞の一致標識のコントローラーを同定する制約(11)、④格付与制約(12)とその階層(13)に基づき、次節で(2a)-(2c)の格フレームと定動詞の一致（の不在）を説明する。

⁵ 意味役割階層を前提とせず、重み付けを施した少数の意味素性（e.g. ±cause/control, ±sentient, ±change of state）により RRG のリンキングを記述する試み（e.g. Kailuweit 2013）もあり、例えば、場所格交替は3番目の意味素性（状態変化）を場所名詞、移動物名詞のどちらが持つかにより生じると考える（cf. Dowty 1991）。

⁶ Van Valin (2005: 110)は(14b)のような具格名詞を道具用法（e.g. *John cut the cheese with a knife*）の具格名詞と統合し、実行者（*John*）と道具（*knife*）が共に論理構造内の活動述語 **do'** (x,...)の第1項（'x'）であることを踏まえて、「節内の他の項（co-argument）より同一の／上位のランク付けを行為者-受動者階層で受け、行為者／受動者として選択される優先度が同一である／より高いにも関わらず、マクロロールの地位を持たない非マクロロール項」を標示する格として具格を定義している。

⁷ たとえば、Van Valin and LaPolla (1997: 377-382)は動作の様態を表す具格の用法（e.g. *The instructor taught the class with enthusiasm*）を捉えるため、別の具格付与規則を提案することを強いられている。

⁸ 中村(刊行中)は Jakobson (1936/1984)の格理論の原則、①格の意味は単義的である、②格の多様な用法は格の一般的意味と文脈の相互作用から派生する、を採用し、ロシア語の具格の多様性を具格標示を受ける名詞のクオリア構造及び動詞と具格名詞の共合成（Pustejovsky 1995）から導くことを提案している。

3. 提案

出発点は、(11)と(12a)で一致標識と主格標識がいずれも「最上位のマクロロール項」に言及して定義されていることである。(17a,b)が本稿の提案である。

- (17) a. 非人称構文=反リンキング (Anti-Linking) 構文
主格名詞と動詞の一致の不在により特徴づけられる非人称構文は、動詞の論理構造から特権的統語的項へ至る2段階のリンキングの操作 (①マクロロール付与, ②特権的統語的項の選択) のいずれかを無化することから生じる反リンキング構文である。
b. 非人称構文(2c)はマクロロール付与を無化したリンキングから生じる交替形式である。

(17a)は前節で導入した、論理構造からマクロロール (付与) を経て特権的統語的項の選択へと至るリンキングを前提としている。例文(2a)と(2c)を比較すると、(2a)は活動事象を表し、実行者である *rozy* ‘roses’ が行為者の地位を得る (cf. Levin and Rappaport Hovav 1995: 135-142) のに対し、(2c)では行為者が *rozy* に付与されていない。一方、(18)は、(7b1)に従って、(2a,c)が共有する論理構造の実行者 (活動述語 *do*’の第1項) である *rozy* が行為者に結び付けられる(2a)のリンキングを示す。

(18) LS: **be-in’** (room, [*do*’ (roses, [*smell*’ (roses))])])

MR:

Actor

(18)の行為者項 *rozy* は、(13)の制約階層に従って主格標示を受け、付加詞として機能する場所名詞 *komnata* ‘room’は空間前置詞を伴って場所格標示を受ける。

他方、マクロロール付与がなされない場合には、実行者である *rozy* ‘roses’はマクロロール (行為者) の地位をもたないため、制約(12a)の適用によって主格標示を受けることは不可能である。制約(12a)-(12d)の中で、マクロロールの地位を持たない実行者 *rozy* に適用できるのは、「マクロロール項以外」の全ての要素に適用可能な(12d)のみである。マクロロール付与がなされない以上、定動詞が一致する対象である「最上位のマクロロール項」も存在しない。このため、動詞はデフォルト素性値「3人称・単数・中性」を実現する一致標識を伴う他ない。⁹ 付加詞に相当する場所前置詞句に加えて、活動主体の *rozy* もマクロロールの地位を持たず、背景化を被った結果、主格名詞に対して述定を行う(2a,b)と異なり、(2c)は事象志向的な文フォーカスを伴うと考えられる。¹⁰

(2)の *páxnut* ‘smell’と同様に3つの交替形式を従える *swarm* 動詞の別の例として、(19)の音放出動詞 *gremet* ‘boom, thunder’があるが、(20)の光放出動詞 *sijat* ‘beam’は(17)の「マクロロール付与の無化」という語彙的な選択肢を持たないため、非人称構文の交替形式は容認不可能になると考える。興味深いことに、別の放出動詞 *ishodit* ‘originate, emanate’では、(21c)が示すように、非人称構文の交替形式は可能であるが、場所名詞 *okno* を主格標示する(21b)の交替形式は容認不可能である。

- (19) a. Basy gremeli v orkestre.
basses.NOM boomed.3rd.PL in orchestra.LOC
“Basses were booming in the orchestra.” [PSA=3rd.PL]
b. Orkestr gremel basami.
orchestra.NOM boomed.3rd.SG.MASC basses.INSTR
“The orchestra boomed with basses.” [PSA=3rd.SG.MASC]
c. V orkestre gremelo basami.
in orchestra.LOC boomed.3rd.SG.NEUT basses.INSTR
“There were basses booming in the orchestra.” [No PSA]
- (20) a. Radost’ sijala na lice Ivana.
joy.NOM beamed.3rd.SG.FEM on face.LOC Ivan.GEN
“Joy was beaming on Ivan’s face.” [PSA=3rd.SG.FEM]
b. Lico Ivana sijalo radost’ju.
face.NOM Ivan.GEN beamed.3rd.SG.NEUT joy.INSTR
“Ivan’s face was beaming with joy.” [PSA=3rd.SG.NEUT]
c. *Na lice Ivana sijalo radost’ju.
on face.LOC Ivan.GEN beamed.3rd.SG.NEUT joy.INSTR
“There was joy beaming on Ivan’s face.” [No PSA]
- (21) a. Svet ishodil ot okna.
light.NOM bloomed.3rd.SG.MASC from window.GEN
“Light bloomed from the window.” [PSA=3rd.SG.MASC]

⁹ 「人称・数・性」のデフォルト素性値は言語により異なる。たとえば、アイスランド語はロシア語と同様であるが、イタリア語、ヒンディ語では「3人称・単数・男性」である。

¹⁰ Lenartaitė-Gotaučiėnė (2014: 142)はロシア語の(2c)に対応する(5c)が文フォーカスを伴うと述べている。

- (21) b. *Okno ishodilo svetom.
 window.NOM bloomed.3rd.SG.NEUT light.INSTR
 “The window bloomed with light.” [PSA=3rd.SG.NEUT]
 c. Ot okna ishodilo svetom.
 from window.GEN bloomed.3rd.SG.NEUT light.INSTR
 “There was light blooming from the window.” [No PSA]

(2c), (19c)-(21c)の中で(21c)のみが容認不可能な理由を推定するのは難しい。ゆえに、「マクロロール付与の無化」は、マクロロールの個数の指定 (Van Valin 1991) と同様の語彙的選択と考える他ない。

最後に、(9b)は(9a,c)とは異なる論理構造を伴う構文である。Rowlands (2002: 68-76)は英語の *swarm* 交替を対象に、(1a)を自動詞を従える場所構文、(1b)を属性述定構文の一事例として分析することを提案し、(1a,b)を語彙的派生により関連づけることを退けている。本稿は Rowlands の構文文法的な記述が(2a,b)の例証するロシア語の *swarm* 交替にも妥当すると仮定し、場所名詞 *komnata* ‘room’が場所格標示を受ける場合は、場所構文の一事例、場所名詞が主格標示を受ける場合には、属性述定構文の一事例であり、*rozy* が香りを放出する活動が部屋の複合的述定 (complex predication) として解釈されると提案する。この提案を踏まえて、(9b)の論理構造は(22)のように書くことができる。

(22) LS: **be’** (room, [**do’** (roses, [**smell’** (roses))])

MR: Undergoer

(22)では、バラが香りを放出する過程 (**do’** (roses, [**smell’** (roses)])) 全体が場所の一時的属性として解釈されている。この意味表示において、*rozy* ‘roses’は属性述定構文の属性を表す述部 (内核) の一構成要素であり、マクロロールの地位を受け取ることは不可能である。制約階層(13)を構成する(12a)-(12d)の中でマクロロールの地位を持たない *rozy* に適用可能な制約は非該当的 (elsewhere) な制約(12d)のみである。このため、*rozy* は具格標示を受ける。表 1 は(2)の *swarm* 交替の交替形式のリンキングを論理構造、マクロロール付与、格フレームについて整理したものである。

表 1: 例文(2a)-(2c)のリンキング

| | Logical Structure | Macrorole Assignment | Case Frame |
|------|-------------------|-----------------------|------------|
| (2a) | (18) | Actor | NOM-LOC |
| (2c) | (18) | None (due to (17a,b)) | INSTR-LOC |
| (2b) | (22) | Undergoer | NOM-INSTR |

表 1 に要約される (本節で提示した) (2a)-(2c)の分析は、(3)-(5)のようなチェコ語、ポーランド語、リトアニア語の *swarm* 交替にも妥当すると考える。

4. 拡張：他動詞非人称構文

前節では反リンキングの操作 (「マクロロール付与の無化」) を仮定することにより、非人称 *swarm* 構文(2c)での主格名詞の不在及び動詞の一致の欠如を導いた。第 2 節で要約した RRG の 2 段階のリンキングはもう 1 つの反リンキングの操作として「特権的統語的項の選択の無化」があることを予測する。ロシア語での特権的統語的項の選択はマクロロール (行為者, 受動者) のランキングによって決まる (第 2 節を参照) ため、特権的統語的項の選択の無化はマクロロールのランキングの停止から生じる。具体例として、例文(23a)-(23c)を考察しよう。

- (23) a. Ivan ubil soldata bomboj.
 Ivan.NOM killed.3rd.SG.MASC soldier.ACC bomb.INSTR
 “Ivan killed the soldier with a bomb.” [Active]
 b. Soldat byl ubit Ivanom.
 soldier.NOM was.3rd.SG.MASC killed.3rd.SG.MASC.PASS Ivan.INSTR
 “The soldier was killed by Ivan.” (Passive)
 c. Soldata ubilo bomboj(/*Ivanom).
 soldier.ACC killed.3rd.SG.NEUT bomb.INSTR(/Ivan.INSTR)
 “(Some unknown force/somebody) killed the soldier with a bomb.” [Transitive Impersonal]

(23a,b)は他動詞のヴォイス交替である。(23c)は他動詞非人称 (transitive impersonal) 構文の一例で、動詞は能動形式であるが、一致標識はデフォルト素性値 (「3 人称・単数・中性」) を実現している。他動詞非人称構文は本稿で言及したバルト・スラヴ諸語以外では、アイルランド語、グルジア語、サカ語、フィンランド語等に見られる (Shore 1988; Stenson 1989; Tuite 2009; Ebata 2013)。(23c)では、他動詞の行為者を主格標示/具格標示を伴って統語的に実現することは不可能である。主格名詞の

不在と定動詞の一致の欠如は非人称構文の一般的特徴であるが、(23c)では対応する人称構文(23a)で主格標示を受ける項の統語的な実現が許されず、対格名詞が単独で生じる点が異なる。

マクロロールのランキングの無化を前提とすると、格標示を受けない名詞は統語的な実現が不可能であるため、動詞の一致標識のコントローラーを同定する(11)と主格を付与する(12a)が機能を停止する。(12a)から主格を付与されない行為者 *Ivan* は統語的に実現されず、(12b)から対格標示を受け取る受動者項 *soldat* ‘soldier’が残される。動詞の一致標識もマクロロールのランキングを踏まえた「最上位のマクロロール項」が決定するため、(23c)では動詞と一致する項はなく、デフォルト素性値(「3 人称・単数・中性」)を実現する。(23b,c)は共に受動者項が唯一の項であるが、(23b)の受動構文では、マクロロールのランキングを前提として、(12a)から節内の「最上位のマクロロール項」である受動者項に主格が付与されているが、ランキングの無化を体現する(23c)の非人称構文では、(12a)は機能しないため、その下位の制約(12b)から対格が付与される (cf. Blevins 2003)。

本節は他動詞非人称構文を(2c)のような非人称の *swarm* 構文と共に、動詞の論理構造から特権的統語的項へと至るランキングを無化する反ランキング構文と見なし、その定義から主格名詞不在の格フレームと定動詞の一致の欠如に加えて、対格名詞の単独での生起も導かれることを示した。

5. 結論

本稿は RRG の 2 段階のランキング理論と具格を最も非該当的な斜格 (Jakobson 1936/1984; cf. Van Valin and LaPolla 1997) として定義する制約(12d)を最下位に含む制約階層(13) (Nakamura 2015) を前提として、非人称構文を交替形式として含むロシア語の *swarm* 構文を分析し、形態語彙的なランキング操作であるマクロロール付与を無化する反ランキングの操作から、非人称 *swarm* 構文の主格不在の格フレーム及び定動詞の一致の欠如を導くことを提案した。更に、もう 1 つの反ランキング操作として(特権的統語的項の選択を無化する)マクロロールのランキングの無化を提案し、この形態統語的操作から、ロシア語(及びその他の言語)の他動詞非人称構文の主要な特徴である対格名詞の単独での生起(と主格名詞の義務的不在及び定動詞の一致の欠如)を説明した。

参考文献

- Blevins, James P. 2003. Passives and impersonals. *Journal of Linguistics* 39(3), pp.473-520.
- Dowty, David. 1991. Thematic proto-roles and argument selection. *Language* 67(3), pp.547-619.
- Dowty, David. 2000. ‘The garden swarms with bees’ and the fallacy of ‘argument alternation.’ In Yael Ravin and Claudia Leacock (eds.), *Polysemy: Theoretical and Computational Approaches*, pp.111-128. Oxford: Oxford University Press.
- Ebata, Fuyuki. 2013. Causative and passive in Sakha: focusing on double-accusative causative and impersonal passive. *Tomsk Journal of Linguistics and Anthropology* 2(2), pp.16-28.
- Fried, Mirjam. 2005. A frame-based approach to case alternations: the *swarm*-class verbs in Czech. *Cognitive Linguistics* 16(3), pp.475-512.
- Jakobson, Roman. 1936. Beitrage zur allgemeinen Kasuslehre: Gesamtbedeutungen der russischen Kasus. *Travaux du Cercle Linguistique de Prague* 6, pp.240-288. Reprinted in Linda R. Waugh and Morris Halle (eds.), 1984. *Russian and Slavic Grammar: Studies 1931-1981*, pp.59-103, Berlin: Mouton.
- Kailuweit, Rolf. 2013. Radical Role and Reference Grammar. In Brian Nolan and Elke Diedrichsen (eds.), *Linking Constructions into Functional Linguistics*, pp.103-141. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Kibort, Anna. 2009. Intermediary agents and unexpressed pronouns. *Proceedings of the LFG 2009 Conference*, pp.378-398.
- Lavine, James E. 2010. Case and events in transitive impersonals. *Journal of Slavic Linguistics* 18(1), pp.101-130.
- Lavine, James E. and Robert Freidin. 2002. The subject of defective T(ense) in Slavic. *Journal of Slavic Linguistics* 10(1/2), pp.251-287.
- Lenartaitė-Gotaučiienė, Kristina. 2014. Alternations in argument realization and problematic cases of subjecthood in Lithuanian. In Axel Holvoet and Nicole Nau (eds.), *Grammatical Relations and their Non-Canonical Encoding in Baltic*, pp.137-180. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav. 1995. *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Nakamura, Wataru. 2015. A neo-Jakobsonian account of default oblique cases: instrumental vs. dative. Paper read at Role and Reference Grammar Conference 2015, Heinrich Heine University, Düsseldorf.
- 中村 渉. 刊行中. 「ロシア語の具格標識の「多義性」の派生: Jakobson 的記述」『日本認知言語学会論文集』19.
- Pustejovsky, James. 1995. *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Rowlands, Rachel C. 2002. *Swarming with Bees: Property Predication and the swarm Alternation*. Unpublished MA Thesis, University of Canterbury.
- Shore, Susanna. 1988. On the so-called Finnish passive. *Word* 39(3), pp.151-176.
- Stenson, Nancy. 1989. Irish autonomous impersonals. *Natural Language and Linguistic Theory* 7(3), pp.379-406.
- Tuite, Kevin. 2009. Agentless transitive verbs in Georgian. *Anthropological Linguistics* 51(3/4), pp. 269-295.
- Van Valin, Robert D., Jr. 1991. Another look at Icelandic case marking and grammatical relations. *Natural Language and Linguistic Theory* 9(1), pp.145-194.
- Van Valin, Robert D., Jr. 2005. *Exploring the Syntax-Semantics Interface*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Van Valin, Robert D., Jr. and Randy J. LaPolla. 1997. *Syntax: Structure, Meaning, and Function*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wierzbicka, Anna. 1980. *The Case for Surface Case*. Ann Arbor, MI: Karoma.